

### 第3回国立市基本構想審議委員会 議事要旨

1. 日 時 平成27年7月17日(金)
2. 場 所 国立市役所第1・第2会議室
3. 出席者 永見副市長  
(委員)  
細野委員長、中原副委員長、小山田委員、観音委員、佐藤委員、十松委員、牧瀬委員、渡部委員、近藤委員、佐伯委員、中島委員、土屋委員、増田委員(欠席)間淵委員、吉岡委員  
(事務局)  
雨宮政策経営部長、黒澤政策経営課長、脇領政策経営係長、赤尾政策経営係主任、青木政策経営係主任  
(株)富士通総研 長谷川
4. 傍聴者 2名
5. 議 事 1. まちづくりの目標について  
2. その他
6. 配布資料
  - ・ 次第
  - ・ 第2回国立市基本構想審議委員会 議事要旨
  - ・ 国立市基本構想「まちづくりの目標」の変遷(資料No.3-1)
  - ・ まちづくりの目標の検討の視点(資料No.3-2)
  - ・ 他市基本構想における「まちづくりの目標」事例(資料No.3-3)
  - ・ 国立市基本構想審議委員会 経過と今後のスケジュール(資料No.3-4)
  - ・ 国立市の主要な計画一覧(参考資料6)
  - ・ 特別用途地区(文教地区)の全国指定状況一覧(参考資料7)
  - ・ 中学生「未来のくにたち」作文募集チラシ(参考資料8)
7. 内 容  
(1) 配布資料について
  - 中学生「未来のくにたち」作文募集は、8月21日に募集を締め切った後、どのような進行になるのか。(委員)

- 庁内で選考委員会を設置し、市長賞、教育長賞、基本構想審議委員長賞を選びたいと考えている。(事務局)
- とても良い取組だと思うので、マスメディアにも是非PRしてもらいたい。(委員長)
- 選ばれた作文は、具体的にいつ頃どのように取り扱うのか。(委員)
- なるべく早期に選考を進め、この審議会にも提示させていただく。また、作文は、今の国立の中学生はこんなことを考えているといったような参考意見として扱っていきたい。(事務局)

## (2) まちづくりの目標について

- 今回の会議において、「まちづくりの目標」を文章化するのは難しいため、今日はこんなキーワードだけは是非入れて欲しいという話をうかがいたい。はじめに今日欠席されている間淵委員から、事前にメールで提出していただいた意見を紹介する。(委員長)
- (以下、欠席委員の意見の紹介)  
私は以前、国立が高齢者になっても住み続けて終末期を迎えられるまちでもあってほしいとの思いを伝えていなかった。これまでの「看取り」という言葉は、生活の中の延長線上にある「死」にはふさわしくない言葉とされてきており、「養う」という表現に変わってきている。このため、医療者が「看取りをする人」ではなく、「養い人」という表現で表されることも増加している。そこでキーワードに「養う」という言葉も検討してもらえればと思う。「養う」には、「歩む」や「育む」という言葉も意味的に含んでいるのではと考えている。(委員長)
- これまでのまちづくりの目標には、「自然」や「緑」といった表現が多かったが、その辺りは外せないという思いもありながら、私としては国立のチャレンジみたいな言葉が入るとよいと思う。(委員)
- 国立が教育文化都市だということを考えると、「相互啓発」、お互いに啓発し合う、高め合う、そういうまちであり続けてほしいと思う。他のまちでは言いづらいが、国立では言えそうな気がする。(委員)
- 前回の会議で副市長から、基本構想は夢を語りながら、日本社会が大変厳しい状況を迎えている中で、国立が輝き続けるためにはどんなことが必要なのかを考えてほしいという話があったが、その辺りはどの程度踏まえればよいのか。(委員)
- また、以前、事務局から説明のあった検討委員会報告書では、10年間の中で、実現を目指す目標を検討するということであったが、他市の基本構想やこれまでの基本構想を見ても、自分の中で実現を図る必要性が合致しない。今回、事

務局はその辺りをどのように考えているのか。(委員)

- 「まちづくりの目標」は、国立市の場合は概ね 10 年の計画期間中に実現を図るべきものと整理しているが、他市の例では実際には遠い将来を見据えての話であり、具体性といった面では表現がぼやけてしまう面がある。(委員長)
- 計画期間を 10 年にするのか、12 年にするのかは今後審議していただくのだが、前回副市長から申し上げた通り、基本構想は夢を語りながらも、日本社会が大変厳しい状況を迎えている中で、国立が輝き続けるためにはどんなことが必要なのかということを考えていきたいという思いがある。(事務局)
- それがある種の目標であり、高い理想を持ちながら、課題を克服していくこと、そういったことを上手く 1 つの言葉にできれば、随分難しい要求をさせていたでいると思う。(事務局)
- 本日の会議では、いくつかキーワードを出していただき、それらを組み合わせながら絞り込みを行い、よいものをつくっていきたい。本日の段階では、皆さんの思いをベースに聞かせていただきたい。(事務局)
- 「まちづくりの目標」では、大きく構想して、のちのち絞っていく方がやりやすいということだと思う。あまり現実的な制約は考慮せずに、こうありたいという姿を出していただきたい。(委員長)
- 日常的な人のつながりが弱くなってきていることが問題だと思っている。地域連携の再構築、推進ということをどこかで共有できるような目標だとよい。『「20 年後のくにたち」検討プロジェクトチーム』から提案のあったまちづくりの目標は、非常によくまとまっていると思う。ただし、例えば「知のまち」というと国立は知識のある方、見識の高い方が多いイメージがあるが、それを地域づくりに活かすという思いが多少弱いのではないか。知をどのように活かしていくのが、もう少し見えればよい。(委員)
- 「人と共に、自然と共に、文化と共に、居心地の良い文教都市国立」という目標を考えてみたが、具体的とまではいえないとも思ったところである。また、あらためて『「20 年後のくにたち」検討プロジェクトチーム』の提案を読み返すと、若い職員の成果を活かすという観点からこれを基本構想の中に盛り込めるとよいと思った。ただし、「歩むまち、育むまち」は、よい言葉だと思ったが、「知のまち」という言葉は、「ち」という音が、地面の「地」という言葉もあり、少しすんなりと頭に入ってこない印象を持った。(委員)
- 国立は知識や知恵、色々なアイデアを持った方がいるということが、検討プロジェクトチームの提案からは、あまり見えてこないと思った。「知」ではなく「啓発」、「ひらく」とも読む「啓」はどうだろうか。「ひらく」とすると、産学官の扉をひらくとか、オープンという意味も込められることから、「ひらく」という字を上手く盛り込めないか。(委員)

- 『「20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム』は、何歳ぐらいの職員で構成されていたのか。(委員)
- 20年後も職員であるという前提のもと、40歳以下として、平均年齢は大体31歳ぐらいだったと記憶している。(事務局)
- 正しく若い方がこれからの国立をつくっていくことになるので、『「20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム』が考えた文言は、目標に盛り込んであげたいが、「文教都市」や「文化都市」といった言葉も入った方がよいと思う。(委員)
- 「まちづくりの目標」は概ね10年間で実現を目指すとのことだが、『「20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム』が考えた文言には、既に実現している内容も含まれている。このため、「文教都市」または「文化都市」といった言葉を加えたいと思う。(委員)
- 私も『「20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム』からの提案は、大変よくできていると感じたが、何点か加えたい内容がある。1点目は「安心・安全」、東日本大震災の発生後、防災に対する関心が高まっていること、また、近年、国立でもオレオレ詐欺の被害者が急増したり、国立駅の周辺で痛ましい事件があったことを踏まえると、やはり「安心・安全」は重要なキーワードではないか。(委員)
- 今年の2月に北海道で、劣化した突出看板が地上に落下し、下を歩いていた女性が意識不明の重体になったという痛ましい事故があった。その後も、あちこちの繁華街で、突出看板の検査をしているとの報道に接した。このような中、京都府では屋外広告物の規制条例を施行し、わずか1年程の間に突出看板をゼロにした。(委員)
- 国立も駅周辺を含め、戦前から商売をしている店舗も相当数あるので、今後はそういったところで看板等のチェックも必要になってくるのではないかと。また、車いすや手押しカートを使う高齢者の方などから歩道のタイルが危ないという意見が大変多いので、やはり今後10年間を見据えると、そういった点を改善したり、防犯カメラを設置して安心・安全を高めていく必要があると思う。(委員)
- まち歩きの楽しさをもっと創出しなければと思う。現在、国立駅が高架化され、その下に店舗が入居しているが、JRでは将来的に高架下の西側にも店舗を入れたいという意向を持っている。このような取組を通じて、国立のまち歩きが楽しくなると、他市からより多くの流入が見込まれると思う。(委員)
- 市が実施したアンケート調査の結果によると、市南部の緑の多さを指摘する意見が非常に多い。市南部は、工業用地の割合が高いという資料もあったが、市南部に企業誘致をするのであれば、一橋大学を卒業した方が起業のために市内へ戻ってもらえるよう、SOHOのようなものを市南部につくれば、若い生産

年齢人口の定住が見込めるのではないか。このような取組と富士見台の再生が結びつくことで、税収も生産年齢人口も増加するのではないか。(委員)

- 資料 No.3-3 の他市基本構想における「まちづくりの目標」では、市の名称が入っているところと入っていないところがあり、キャッチフレーズだけを見るとどこの市かが分からない。このため、市の名称を入れるのであれば、平仮名で「くにたち」と入れたいと思う。「くにたち」という文字を入れるだけで、恐らくメッセージが伝わると思う。(委員)
- 国立は、国立駅を中心に土日は外に人が出て行くのではなく、むしろ市外から人が多く来る市だと思っている。このため、やはり「流動」や「行って戻る」といった言葉がほしいと思う。(委員)
- 「チャレンジ」、「挑戦」といった言葉を入れた方がよい。幼稚園から小・中学校、青年、壮年、老年、また農商工、文化芸術などすべての分野や年齢で上を向いてチャレンジしていく姿勢が必要だと思う。チャレンジの内容は些細なことや身近なことでよく、個々の勉学をがんばるとか、助け合うこともチャレンジといえる。このまちに来るとチャレンジができる、挑戦ができることが伝えられるとよい。(委員)
- 他市のものを見ると、どこに視点があるのかわかりにくく、ぼけている印象を抱くため、その点は注意して文言を検討したい。また、市の名称については、やはり漢字よりも平仮名で「くにたち」とした方がよいのではないか。(委員)
- 『「20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム』には市民参加で関わっており、若い職員が非常によくまとめたと感じている。現在、時代の流れが非常に速い中、様々な面で5年前に常識だったことが非常識となったり、国の方針もどんどん変わったり、また、市民にまちづくりへ参加してほしいと言いながら、市民がよく分からないところに置いてきぼりにされている感覚が少しある。(委員)
- 行政には行政の、市民には市民、企業には企業の強みがある。これからは、それぞれの強みを活かしながら、まちをどのようにつくっていくのかを皆で考えていかなければ、時代の流れの速さに間に合わなくなると思う。(委員)
- 現在、まちづくりの面で行政からの情報を待っているのでは間に合わない。これからのまちづくりの方向性として、市民が行政に何かをしてもらうのではなく、市民も行政も企業も強みを活かしながら、多様な形で力をミックスし、このまちをつくっていくということを表現ができればよいと思う。(委員)
- 「知のまち、歩むまち、育むまち」は、文教都市としての国立らしさを非常によく表していると思う。しかし、対外的なイメージもシティセールスの面からは重要だと思うが、やはりここに住む私たち市民のための国立、市民のための行政運営がどのようになされるのかということ、まちづくりの目標として何

か加味できるとよいと思う。(委員)

- 「文教都市くにたち」という都市像があり、その都市像をどのように今後 10 年間で実現していくのかを表したものが「まちづくりの目標」と考えた。このため、「文教都市くにたち」という名詞に対し、「まちづくりの目標」は動詞にした方がよいと思う。未来に向かって支え合うや認め合うといった表現より、若い世代が新しいことに挑戦し、今までにないものをつくっていきけるような活力が感じられるまちにしていくことが大事だと思う。(委員)
- そういう意味では「つくる」や「育む」というのが、言葉としてよいと思う。「まちづくりの目標」は、動詞で表現した方が目標との関係性も分かりやすい。なぜ動詞がよいかというと、こういう目標を掲げたら、それでは何をつくったのか、何を育んだのかが議論しやすくなる。(委員)
- 行政と市民が一緒にやっていく「協働」、一緒に頑張っていく「協力」、共に生きる「共生」のように、「協働」、「協力」、「共生」が韻を踏んでいて非常に分かりやすいと思う。また、子どもから大人まで分かるように「夢」という表現も盛り込んでどうか。(委員)
- 私も「まちづくりの目標」に市の名称を入れる場合は、平仮名の方がよいと思うが、出来れば市の名称を入れなくても国立ということが伝わる目標もよいのではないか。(委員)
- 魅力的なまちづくりとして、滋賀県長浜市の事例がある。長浜市は、市そのものが 1 つの博物館都市であり、「市民皆が学芸員」というキャッチフレーズを掲げて、市民がまちの歴史や魅力を語ることができる。国立でもそういうことができたらいよいと思う。このことが「相互啓発」、市民一人ひとりがただ暮らしているのではなく、自分のまちを愛し、魅力を感じ、それを支えていることにつながる。(委員)
- 多様な挑戦、多様なつながりが重要である。何でつながるかはその人の特性によるが、何らかとつながりを持ち、何らかの挑戦ができるということは、国立らしさを保つことに結びつくのではないか。(委員)
- 「上を向いて」というフレーズは、とてもよい言葉だと思う。(委員)
- 「まちづくりの目標」の主語は市民であり、市民にとってのまちづくりであるので、合意形成をしやすい言葉を選んでいただきたいと思う。たとえば「協働」はよい言葉だが、協働が嫌な方、やりたくない方もいる。「挑戦」も同様である。全員には合意形成が難しいと思うが、皆がいかに納得できるものを選んでいくのが重要だと思う。(委員)
- 「まちづくりの目標」を動詞で表現することや、「挑戦」という言葉を入れるのはよいアイデアだと思った。先日、市内で初めてマラソンのイベントが開催されたが、これも今までに交流のなかった団体同士が連携して「挑戦」したこと

により、非常に成功裏に終わったと感じている。(委員)

- 「成熟」という言葉があるが、ひとまちも色々な面で成熟していく必要がある。国立は少し大人びた感じの人、そういう意識のある方が多いと思うので、「成熟」という表現を盛り込んでもよいのではないか。(委員)
- 「挑戦」すると間違ふこともある。それを寛容性をもって受け入れるには、「成熟」が必要であるという点で、「挑戦」と「成熟」にはかみ合うところがある。(委員長)
- 資料 No.3-3 の他市基本構想における「まちづくりの目標」では、「ゆめ・うめ・おうめ」という表現が韻を踏んでいてよいと思った。そこで、五七五の俳句形式で「まちづくりの目標」を考えてみてはどうか。また、「国立」という言葉を入れずに国立がイメージできるような表現を考えてみたいと思う。(委員)
- 動詞で表現するという事は非常に良いと思う。向上する、というニュアンスの動詞を入れたいと思う。「前に進む」「上を向く」などが。(委員)
- 「まちづくりの目標」において、「国立」という言葉がなくても国立であることを表現するのは、非常に難しいと思う。今回「まちづくりの目標」に掲げた言葉が10年後、12年後に、国立を表現できる言葉となればよい。(委員)
- 個人的にはあまり言葉遊びにならないようにした方がよい。先日、横浜市の共創推進課の話が聞くことができたが、横浜は企業の力、住民の力、行政の力を合わせながら、新しいまちづくりをしていくということで、それは横浜だからこそ出来る話だという印象を持った。これを国立にそのまま当てはめるのではなく、その要素を上手く活用して国立をもっと住みたくなるまちを目指すというのは、「まちづくりの目標」としてよいのではないか。(委員)
- 長浜市の話は面白い。ディズニーランドが従業員をキャストと呼ぶことと通じるところがある。「理念」「都市像」「市民像」がわかるようにすることが大切であろうとも思う。そのように考えを進めていくと、「文化を創造するまち」という表現は、恐らく「国立」という言葉を使わなくても、多くの人に分かってもらえるのではないか。少し言葉を柔らかくすることと、もう少し概念を広げた言葉としていきたい。(委員)
- 「文化の創造」や「価値の創造」という意味では、「創る」という視点が必要ではないか。(委員)
- 「もっと住みたくなるまち」「もっと」という表現がおもしろいと思う。また、人の目にふれやすいことを前提に考えた場合、やはり分かりやすい、認知されやすい言葉を選ぶことができればよいと思う。(委員)
- キャッチフレーズの要素はいろいろと意見が出たところと思う。若い委員の皆さんの意見を尊重したい。(副委員長)
- これまでの意見を大括りにすると、「まちづくりの目標」は動詞でダイナミック

なイメージを醸し出す、『「20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム』の提案については「知のまち」が異質であるため検討を要する、「挑戦」というキーワード、「国立」という言葉を入れなくても国立であることが分かるようにする、「国立」という言葉を入れるのであれば平仮名とするといった意見があった。  
(委員長)

- 最後に、このキーワードだけは是非入れてほしいという意見を皆さんからいただきたい。「もっと住みたくなるまち」をもう少し縮めると、どのような表現になるのか。(委員長)
- 「もっとずっと住みたいまち」。キャッチフレーズは非常に重要であり、特に今回は今後10年後以降の「まちづくりの目標」を表すことになるので、じっくりと考えた方がよいと思う。(委員)
- 「挑戦」や「安心・安全」といったようなキーワードをどのように組み込んでいくのかは、今後あらためて考えていただきたい。また、「育む」や「歩む」、「養う」というキーワードがあったが、「まちづくりの目標」として、どのような動詞が国立にはまるのかを考えてほしい。(委員長)
- いままでの提案の中に「心」がない。「知」はあっても「情」はないように感じる。(委員)
- 「もっと、ずっと、きっと(必ず)国立」はどうか。(委員)
- 『「20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム』の提案は副題に使い、キャッチフレーズには、より人の目に付く言葉を「まちづくりの目標」として立ててはどうか。(委員)
- 市外の人たちがこのキャッチフレーズを見て、「国立に住もう」、「国立を選んでくれる」といったものが要素としてあるとよいかもしれない。まちの魅力は、市外から非常に憧れを持たれることと、市内に住む人たちから愛着を持たれるという2つの側面が非常に大事である。(委員長)
- 市外の人たちにまちをPRするためのキャッチコピーと、「まちづくりの目標」のキャッチフレーズとは性格が異なると思う。後者は、市民と行政がどのようなまちをつかっていきたいのか、つくろうとしているのかを表すものであり、市外の人たちにまちをPRするためのキャッチコピーとは、全然違うものだと考えた方がよい。(委員)
- 『「20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム』の提案を活かすのであれば、歩むまち、育むまち、学びあうまち、とするとくにたちらしいと思う。(委員)
- 一人称がふさわしいのか疑問もあるが、子どもたちも含めてみんなが大切に思えるまちという観点から「わたしのまち」というのもよいと思う。(委員)
- 過去4回の基本構想では、時代背景を踏まえ、「まちづくりの目標」を選んでいる。第一期は、高度経済成長のもと、環境破壊が進んだことを背景に、「人間を

大切にする」が最初に来て、「自然を守ろう」や「教育を尊重する」、「生活を大切にする」、第二期は、いわゆるオイルショックを経験し財政的にも行き詰まった中で、やはり活力で組織経営をどうするかということ。(副市長)

- また、バブル崩壊後の第三期では、緑豊かで誇りを持って景観を残し、そして人が交わって文化を創っていくという表現に変わっている。第四期になると、多様性の範ちゅうが拡大し、市民の夢を集めたらどんなまちがよいのかということで、このような表現になっていると認識している。(副市長)
- 現在、非常に多様性や寛容性が求められている中、10年後の市民の夢、住みたいまち、もっともっと住みたいまちにしたいという思いと、それを支えるために何をベースにまちづくりを進めていくのか、文教都市国立の10年後の姿を市民の方々に分かっていただけるような「まちづくりの目標」をご検討いただければ非常に幸いである。(副市長)
- 今後、10年後以降を見据えた場合、将来人口の推計結果からは暗いことしかないように感じるが、その中でもやはり国立が輝いて、小さいまちながら魅力を保つためには、やはりより多くの人たちに住みたいと思ってもらうことが重要だと思う。(委員)
- 今後10年後以降を考えた場合、団塊の世代が後期高齢者の領域に突入する2025年まで色々なことがあると思うが、医学等も進化し、将来に対する光あるいは挑戦するまちづくりをお願いしたい。(委員長)
- 「まちづくりの目標」として、チャレンジしていく、ダイナミックな姿勢を表現する。もっともっと住み続けたい、愛着というのも市民の声として出していきたい。また、安心・安全をキーワードに入れたいという意見があった。また、多様性や寛容性という表現を盛り込みつつ、成熟し、かつ若者にも支持されるまちを考えていかないといけない。若い人たちは、経済力の支えにもなるので、若い人たちにとっても魅力的なまちも必要だという話があった。(委員長)

### (3) その他について

- 現在、事務局の方で基本計画(案)の検討も進めていると思うが、基本計画(案)が審議会に提示されるのはいつ頃か。(委員)
- 基本計画(案)の検討は、若干遅れて進行しており、9月ぐらいに素々案が出来るのではと考えているが、審議会にいつ頃提示できるのかは、現時点では未定である。(事務局)
- 次回の議題の1つである「土地利用」では、どのようなことを審議するのか。(委員)
- 南部以外の地域では、既に宅地開発も進みきっており、審議の中心は南部地域の今後の土地利用のあり方になるかと考えている。(事務局)

- 空家対策といったことは審議の対象から外し、あくまで大括りの都市計画としての土地利用のあり方を審議するという理解でよいか。(委員)
- その通りである。空家対策については基本計画の方で取り上げる内容と考えている。(事務局)

以上